



# 学生による教育支援の 可能性と課題

—東北大学の国際共修授  
業を事例として—

田中 正弘 (教学マネジメント室)  
竹内 千晴 (教育学類 4年次)

# 第三テーマ班の目的

- 本学の教育改善に興味を有する学生を募り、改善に用いるデータを集めてもらう。そして、そのデータの分析結果を通して、本学の教育の課題を発見してもらう。
- これらの課題は、**教員とは異なる学生の視点**に基づいて発見されるため、**教員にとって「盲点」となっていた課題**が含まれることを期待できる。



従って、本班の目的は、教育課題の発見に「学生の視点」という、新たな視点を加えることとする。

A photograph of a person's legs running on a paved road. The person is wearing black shorts, white socks, and running shoes. The road has a yellow dashed line down the center. The background shows a sunset sky with orange and grey clouds, and a flat landscape with low hills in the distance.

# 目次

1. 国際共修について

2. 学生による教育支援の可能性

3. 調査対象校の実践

4. 調査の結果

5. まとめ

# 調査の目的

- ↪ インタビュー調査を基に、東北大学の国際共修プログラムの実施の現状とその影響を把握し、本学への示唆を得る。
- ↪ 学生による教育支援の活用について、東北大学の実践を把握し、その影響と課題を明らかにする。

# 【背景】筑波大学の国際化について

## 【教育・人材育成に関わる目標・スローガン】

- ↯ 国際的互換性のある教育を実施する体制を確立し、地球規模で活躍できる高度人材を育成する
- ↯ 学内の国際化を推進し、地球規模課題の解決に向けた知の創造とこれを牽引するグローバル人材育成を推進。（国際戦略基本方針2018 目標2） / （スチューデントサポートセンターHPより）

### 【現状】

- ・外国人教員等：24.9%
- ・外国人留学生：19.7%
- ・日本人の留学経験者：16.8%
- ・外国語による授業科目割合：16.8%
- ・TOEFL550点以上の学生：6.8%



### 【10年後の数値目標】

- ・外国人教員等：52.2%
- ・外国人留学生：30.4%
- ・日本人の留学経験者：30.7%
- ・外国語による授業科目割合：23.1%
- ・TOEFL550点以上の学生：32.2%

## 【現状や課題】

- 留学生の受け入れ拡大により、様々なシーンで留学生と日本人学生との交流の機会が増大  
→「国際性の日常化」の実現が急務。（スチューデントサポートセンターHPより）

- 「内なる国際化」が課題

「大学を強くする「大学経営改革」(20) 大学における国際戦略の意義と課題」  
(吉武博通 筑波大学理事・副学長 大学院ビジネス科学研究科教授)

# 1-1. 国際共修とは

【定義】 言語や文化の異なる学習者同士が、グループワークやプロジェクトなどでの協働学習体験を通して、**意味ある交流 (Meaningful Interaction)** により相互理解を深めながら、己を見つめ直すメタ認知活動を経て、新しい価値を創造する学習体験 (末松 2019)

## 文化背景の異なる学習者を対象とした正課内外活動

交流・理解促進・議論・協力などの協働学習効果

## プロジェクト・ベースド・ラーニングの多様な設定

社会課題への取り組み、産学連携、地域連携  
先端技術、SDGs、伝統文化、観光、農業、福祉・・・

## 学習者中心の授業設計

「学び合い」を効果的に取り入れた教育実践



## 【国際共修の効果】

- ↓ 学習者の異文化理解の深化、視野の拡大、事業立案への認識促進、肯定的な態度変容、協働性、多文化理解態度 (加賀美 1999、2006)
- ↓ 異文化理解の深化やコミュニケーション能力の向上 (中野 2006、北出 2010)

# 意味ある交流（Meaningful Interaction）とは何か？

- 次のような状況のみでは国際共修は実現しない
  - ✕ 留学生と国内学生など、文化的・言語的に多様な背景をもつ学生が同じクラスにいる
  - ✕ ディスカッションやグループワークを学習時間にふんだんに取り入れている
  - ✕ 学習者の外国語能力向上を最優先の目的としている
  - ✕ 学習者の言語運用能力や経験・知識・スキル・態度の差を、「多様性」と捉えて授業や活動を設計している

## 【授業設計のポイント】

- 文化的・言語的背景が異なる学習者が集まっていることと、授業・活動の目標との関連づけ。
- 議論やワークなどの成果や評価のされ方を、学習者全員が理解できる状態。
- 「協働による学びの深化・広がり」、「価値観の再構築」に重きを置く学習到達目標。
- 評価において、学習者の差や違いがどのように考えられ、公平に評価されるかの説明。



# 1-2. 国際共修がなぜ必要なのか？

## 【国際共修が必要とされる背景】

- ① グローバル化により複雑化する国際社会
  - ↳ 文化や言語の壁を越え、互いの違いを尊重しながらアイデアを創出する場や教育環境の設計が可能に
- ② オンラインを活用した国際共修
  - ↳ 留学で得られるような協働学習体験の機会提供が可能に
- ③ 留学が困難、あるいは希望しなかった学生への学習機会の提供
  - ↳ 国際共修を教育カリキュラムに組み込むことで、大学教育全体の質的向上を期待。

## 【海外における国際共修の動向】

- 多文化社会のアメリカやオーストラリア、オランダやドイツなどの欧州非英語圏、アジアではシンガポールや韓国でも、教育・学習実践例の報告。

## 2-1. 国際共修の実践上の課題

### 【教員にとっての課題】

- 自然発生的には学び合いは生まれないため、教員による仕掛けが必要。
- 通常の授業より準備に時間がかかる
- 履修者の知識や学習意欲、関心に、授業の進行が左右される

### 【授業運営上の課題】

- 教員一人で授業内プロジェクトの進行や学生をつまづきを把握できない
- 時間的制約により、きめ細やかな言語的配慮をすることの限界。

現場の実践報告から

**学生サポーターや、学生ファシリテーター**の必要性が指摘されている

## 2-2. 学生による教育支援の可能性

### 【仮説】

学生サポーターは、以下の点で国際共修の質保証に有効ではないか？

#### ①授業運営

- ← 授業内で、受講生に対するきめ細やかな対応が可能になる
- ← 言語的配慮や、協働学習へのサポート

#### ②教育改善

- ← 学生サポーターが、教員と受講生の間に立って学習補助活動を行う →  
受講生のつまづきや困難が、教員に共有される

## 3-1.調査対象校の実践 ①東北大学について

### 【国際共修に関する取り組み】

- ↯ 国立大学で最多の国際共修授業開講数（2020年時点、70科目開講。）
- ↯ 授業手法は課題解決型やプロジェクトを取り入れて学生参加型で展開されるものなど様々
- ↯ 2020年度～ 全学教育改革で必修・選択必修化へ
- ↯ 「大学の国際化推進フォーラム」採択プロジェクトの幹事校を務める（2021年度～）
  - ↯ 参加大学間での教育活動やその連携、モデル構築の中核を担う
    - ↓ 東北大学、福島大学、東京外国語大学、信州大学、大阪大学、神戸大学

## 3-2.調査対象校の実践 ②国際共修サポーター

### 【概要】

- ← 授業科目ごとに1～5名ほど配置
- ← 教員と履修生の上に立ち、教育学習活動の補助を行う
  - ↓ 例：議論に参加できずにいる履修生の支援や、ファシリテーション、課題進捗状況のモニタリングなど
- ← 国際共修授業の履修経験を要件とし、学生の属性や学年等を問わず、全学で募集。（留学生もサポーターとして参加。）

## 3-3.インタビュー調査の概要

- ↪ 2022年12月～1月、国際共修プロジェクトの中核を担う教員3名と学生サポーター2名を対象に、半構造化面接を実施。

<主な質問は以下の通り>

- ↪ 教員に対して

- 日本人学生と留学生が学び合うことのメリット・デメリットについて
- 学生サポーターを活用する意義と課題について

- 学生サポーターに対して

- 授業中の受講生のサポートに関して、成功した経験や葛藤を覚えた経験
- 授業担当教員と、授業実践の改善についてどのように話し合うのか

## 4. 調査結果 (1/6)

### ○教員への聞き取りから分かったこと

#### 学生サポーターの 意義や役割

①複数の目で履修生を見ることができる

→グループ活動における、受講生個々の働きや  
貢献度の把握が可能になる。

- 声の大きい学生やパフォーマンス上手な学生が上手に見えるが、しっかりと仕事する学生さんもいるし、困ってる時に助け舟を出す学生さんもいるので、そのような学生さんをサポーターが見つけたら、目をかけてくれたりするのには利点としてあります
- 「学生主体の授業にすると、誰が入るかによって全然やり方が全然変わってしまうので、常に学生を見ていないといけない難しさがある。しかし、そういう時に学生サポーターが活躍する。」
- 次のグループ分けの参考になるように、誰がどういう発言、発言量とリーダーシップとか、言語レベルを確認してもらって、みんな(学生サポーター)でエクセルに書き入れて。授業外でも、(チームで)どういうことが起こっているのかを確認して。

## 4. 調査結果 (2/6)

### ○教員への聞き取りから分かったこと

#### 学生サポーターの 意義や役割

②つまづいた学生の支援が可能になる  
→教員側にとって、サポーターは受講生の  
悩みを間接的に吸い上げる存在。

- 「教員からだ、つまづいている学生が見えにくく、みんな消えて(履修取消の形で授業を去って)しまう。その理由もわからない。」
- 「英語でのコミュニケーションが辛くて、無理です」と受講生が泣いているのを、サポーターさんが見つけて、なだめて。今、その受講生さんが学生サポーターとして入ってくれていたり。そのような経験(異文化間コミュニケーションにおけるつまづきを乗り越える経験)をした子こそ、いい活躍をしてくれるんじゃないかと思います。」

## 4. 調査結果 (3/6)

### ○教員への聞き取りから分かったこと

#### 学生サポーターの 意義や役割

#### ③教員が授業のスタイルを捉え直す

→学生サポーターの気づきや提案。

→他の教員の授業実践の工夫をサポーターを通して知ることができる。

- 「国際共修サポーターのいいところは、みんなそれぞれがいくつかの授業に入っているので、他の授業の情報をくれるんですよ。」
- 「私たち(教員)の学び合いを、国際共修サポーターがファシリテートしてくれているとも言えます。」

## 4. 調査結果 (4/6)

○教員への聞き取りから分かったこと

学生サポーター活用に関する課題

### ①学生サポーターとの意思疎通の難しさ

「サポーターの皆さんは、ちょっと皆さんそれぞれ違うんですね。TAとサポーターがどういうふうに関わりを持つかは、私(教員)の中ではあるんですけど、なかなかそれが(サポーターに)伝わらなくて。毎回毎回スムーズにしているかという、そうでもない時もある。」

### ②学内での理解促進

「(他の国際共修の担当教員に、学生サポーターを活用する意義が)なかなか伝わらない。いたほうがいいってことが伝わらない。あるいは、そのシステムがよく理解できていないとか。」

## 4.調査結果 (5/6)

### ○学生サポーターへの聞き取りから分かったこと

#### (1) 授業運営に関する工夫や取組

##### 【Aさん】

- ・ 多様なバックグラウンドを持つ受講生同士が、各自の強みを発揮できるような配慮
- ・ 異文化コミュニケーションのロールモデルを意識
- ・ 「受講生が常に安心して挑戦できる環境づくりを第一に取り組んでいる」

##### 【Bさん】

- ・ ファシリテーションにおいて、どう振る舞えばよいか分からなかった場面
- ・ 受講生とフラットな関係を目指すも、言語使用に壁を感じた経験

## 4. 調査結果（6/6）

### ○学生サポーターへの聞き取りから分かったこと

#### （2）授業改善に関する工夫や取組

##### 【Bさん】

- ・受講生の感想シートに、自らフィードバックを行った。  
→受講生の課題や困りごとの発見 & 教員に共有、解決することに繋がった。
- ・新任の授業担当教員に、助言や提案を求められた経験。

##### 【Aさん】

- ・授業の改善案や気づきを教員に示す上で、葛藤を抱えた。  
→教員側が、学生サポーターの介入は最小限でよいとする場合。

## 5-1. 調査結果のまとめ

<国際共修に学生が教育支援として関わることで>

- ↪ ① 教員側が、授業スタイルを捉え直し、授業の再構成を促す可能性がある
- ↪ ② 国際共修サポーターは、受講生の信頼関係の構築、異文化間交流の促進に役割を果たし、大学の「内なる国際化」の促進に貢献する存在

<課題>

- ↪ 教員と学生サポーターの期待のすり合わせ、意思疎通に難しさ
  - ↓ 教員組織での理解浸透
  - ↓ サポーターに対する研修の充実、研修内容の検討

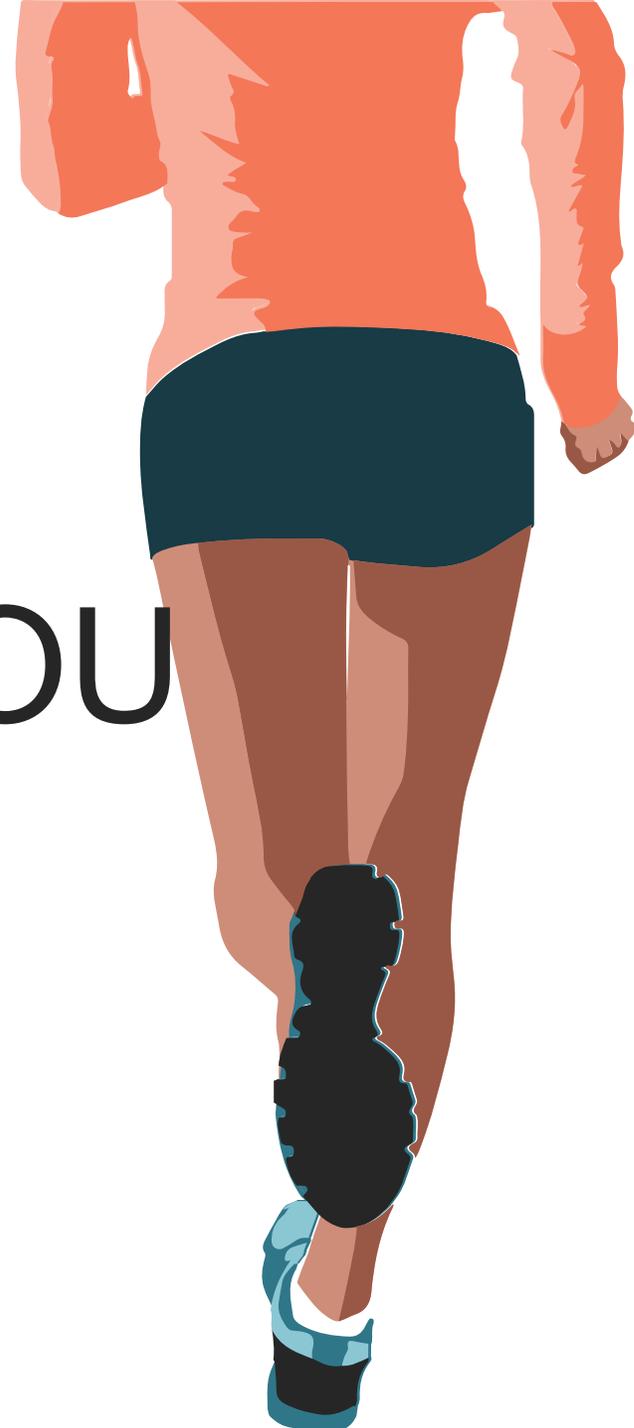
## 5-2. 本学への示唆

- 学生による教育支援の活用は、国際共修の授業実践以外にも応用可能ではないか
  - ↳ 学生主体の教育実践、PBL型の授業など
  - ↳ 学生と教員の協働のあり方の再考のきっかけに
- ↳ 国際共修の教育実践のあり方を、どのように本学に取り入れていけるだろうか
  - ↳ 本学全体の国際化に関する方針やビジョンとの関連
  - ↳ 留学生の受け入れ体制やカリキュラム改革など、国際化に関する環境整備とともに教育実践の導入・拡大を考える必要性



THANK YOU

ご清聴ありがとうございました



# 参考文献・参考資料

加賀美常美代 (1999)「大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入」『コミュニティ心理学研究』2(2), pp.131-142.

加賀美常美代 (2006)「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか --シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合」『異文化間教育』(24), pp.76-91

北出慶子 (2010)「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案：異文化間コミュニケーション能力理論と実践から」言語文化教育研究 (9) pp.65-90

末松和子 (2019-a)「国際共修の検証—文献リサーチを通して見えてくるもの—」『留学交流』95, pp.1-12.

中野はるみ「異文化教育における留学生の役割」『長崎国際大学論業』第6巻pp.55-64

筑波大学 スーパーグローバル大学プロジェクト 構想調書 (平成26年度)

東北大学 スーパーグローバル大学プロジェクト 構想調書 (平成26年度)

東北大学 ICL Channels Webサイト <https://intercul.ihe.tohoku.ac.jp/icl/>

東北大学ビジョン2030

[https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/president/01/president0102/vision\\_2030.pdf](https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/president/01/president0102/vision_2030.pdf)